

日本語学習者の漢字習得プロセスについて考える — タイの非漢字系学習者¹ へのアンケート調査を通じて —

栗原 由加

キーワード：非漢字系学習者、好きな漢字、覚えやすい漢字、漢字習得プロセス

1. はじめに

非漢字系の日本語学習者が増加する中で、日本語教育における文字教育、特に漢字教育の問題が重みを増している。成人した後に日本語を学ぶ非漢字系の多くの学習者にとって、漢字学習は時間のかかる辛いプロセスであり、日本語を学ぶ上での大きな困難となっている。また、日本語教師からも、非漢字系の日本語学習者に対する漢字教育の難しさについての指摘は多い。本研究は、どのように非漢字系の日本語学習者の学習意欲を継続させるかという問題について方策を考え、漢字学習方法、テキスト開発に反映させることを大きな目的としている。そして筆者ら²は、この問題に関する手がかりを得るため、非漢字圏の国々の教育機関の協力を得て、非漢字系の漢字学習者の漢字学習状況について調査を行ってきた。

調査方法としては、日本語学習者に「好きな漢字」「覚えやすい漢字」についてアンケート、インタビューを行い、併せて日本語教師にも漢字教育に関するインタビューを行うという方法を採用している。これまでの調査を通じ、栗原、関（2017）ではヤンゴン外国語大学（ミャンマー）、栗原、関（2018）ではラオス国立大学（ラオス）の調査結果をもとに、漢字学習には「楽しい」と思えるようなプロセスもあることを示してきた。

そこで次の問題として本研究が着目するのは、漢字学習プロセスの中で「漢字学習が嫌になる」という問題である。これまで本研究が行ってきた一連の調査の中で、多くの日本語学習者が漢字を「覚えられない」「難しい」と言っていた（栗原、関（2017）pp.26-27）。また、日本語教師へのインタビューによると、既に初級の段階から漢字教育には苦勞しているということである。小学校就学時から漢字を学習している日本語母語話者にとって、日本の小学校で学習するような漢字を「覚えられない」「難しい」というのは共感しにくい感覚であるが、そこに日本語教育における漢字教育の難しさがあるとも言える。非漢字系の日本語学習者にとって、初級で学ぶ漢字も「覚えられない」「難しい」というのは、漢字学習のどこに問題が生じているということなのか。そこで本稿では、2017年9月7日に、バンコクの日本語学校である JEDUCATION CENTER³の協力を得て行ったアンケート調査をもとに、初級の日本語学習者の漢字習得において見られた現象について示し、考察を行いたい。

2. 先行研究

本研究が手法として用いているアンケートは、加納ほか（1989）が日本語学習者の漢字記憶のプロセスを明らかにするための調査として行った自由放出法を参考にしている。この手法は、日本語学習者のための効果的な漢字学習方法の検討を目的に、制限時間を設け、被験者に頭の中に浮かんでくる漢字を自由に書き出させるというものである。そして、出力された漢字の時間的変化や、どのような漢字が出力されたか、また連続的に出力された漢字どうしの関係から被験者の連想の傾向はどのようなものかを示す。加納ほか（1989）では、以下の主張が行われた。

- 日本語学習者による漢字の出力理由は、大きく形態的連想と意味的連想の二つである。

自由放出法は、日本語学習者が記憶している漢字を、連想というネットワークの観点から明らかにするという点で興味深い。ただし、加納ほか（1989）、伊藤ほか（1999）でも指摘されているように、漢字の出力理由の収集方法に限界があり⁴、被験者が漢字を出力した理由を正確に収集することが難しい。この研究を受けて、伊藤ほか（1999）は、自由放出法による調査方法を発展させ、日本語学習者による漢字の自由放出後にインタビューを行うという手法で、漢字の放出理由をより正確に調査し、日本語学習者による漢字の出力理由と日本語力との関係について、以下の指摘を行った。

- 形態手がかり（加納ほか（1989）の形態的連想）、意味手がかり（加納ほか（1989）の意味的連想）のどちらがよく使われるかは、被験者の日本語力と関係がある。漢字能力の向上に伴って形態手がかりより意味手がかりの方が多く用いられるようになる。

筆者は、これらの主張を漢字記憶に関する常識的な指摘であると考えている。この主張を「漢字学習の進め方」に応用すれば、まず文字学習としては、簡単な字形から複雑な字形へと学習を進め、また、語彙学習としては、具体的な意味の言葉から抽象的な意味の言葉へと学習を進め、ある程度文字と語彙を習得した後は、更に語彙を増やす中で漢字も併せて覚えていくという一般的な方法になる。このプロセスは十分共感できるものであり、漢字学習のテキストも通常はそのプロセスに沿って作成されている。では、なぜ実際の漢字学習においては、そのプロセスがスムーズに進行せず、早い段階で学習者は漢字学習が「嫌になる」のか。

筆者は、従来の自由放出法による学習者の漢字記憶の研究が、学習者が覚えている漢字のみを取り上げて、それを思い出した手がかりを量的に分析し「漢字記憶の手がかり」としてきたことが、漢字の「覚えられない」「難しい」側面に焦点を当てることができなかった理由ではないかと考えている。そこで本稿は、非漢字系の日本語学習者が漢字学習を進める

際、その習得プロセスで何が起きているかをより詳しく見るために、学習者が挙げた漢字の内訳に着目する。そして「どのような漢字が思い出しやすいのか、なぜ思い出しやすいのか」を分析、考察することで、「何が思い出しにくいのか、どうして思い出しにくいのか」を考えるヒントとし、漢字習得プロセスにおいて生じている問題について考えたい。

3. 調査概要

3.1. 調査対象

今回の調査にご協力いただいたのは、タイ、バンコクの中心部にある日本語学校（JEDUCATION CENTER）である。2017年9月7日に調査を行ったクラスは、日本留学、タイの日系企業への就職を目標とするインテンシブクラスである。このクラスでは、13名の少人数で週5日、1日4時間の授業を受けている。日本語教師は全員日本人、1タームは3か月であり、最初の1、2タームで『みんなの日本語初級ⅠⅡ』（スリーエーネットワーク）を学ぶ。続く3ターム目からは、『みんなの日本語中級ⅠⅡ』（スリーエーネットワーク）を1年以上かけて学ぶ。

また、漢字学習については、最初の1、2タームで『ストーリーで覚える漢字300』（くろしお出版）を使用している。毎回の授業時間の中で漢字学習の時間を取り、4～5個の漢字を覚え、次の授業でテストを行うというサイクルで、インテンシブクラスの2タームの間に300個の漢字の読み書きができるようになることを目標にしている。調査を行ったクラスの学生の日本語能力試験の合格状況は、N4合格者5名、N5合格者1名、7名は未受験であった。

JEDUCATION CENTERの日本語教師へのインタビューによると、学生の主な学習目的は、日本にある提携の日本語学校や大学へ留学すること、またはタイの日系企業へ就職することであり、学習意欲は高いとのことである。そして、日本語ができれば給料面で優遇されることが理由で、卒業後は日本で働きたいという学生の割合が多いとのことだった。ただし、授業外的环境としては、学校を出ると日本語に触れる機会がほとんどない。日本語学校卒業後に企業に就職した学生からは、書類を読んだり、電話対応をしたりすることが難しいという話があるとのことだった。

3.2. 調査方法

本調査では、上記インテンシブクラスの13名の学生に以下の手順でアンケート調査を行い、その後、日本語教師に学習方法、学習環境についてのインタビューを行った。

- ・質問者は、学生全員に教室で対面し、調査の趣旨を説明する。
- ・アンケート用紙を配布する。
- ・学生は、アンケート用紙に、その場で思いつく「好きな漢字」「覚えやすい漢字」を上限

5 個記入する。また、記入した漢字、漢字語彙の隣の欄に、その漢字、漢字語彙を挙げた理由を記入する。

4. アンケート結果

まず、「好きな漢字」「覚えやすい漢字」を挙げた理由の分類方法を、以下「表 1: 「好きな漢字」「覚えやすい漢字」の出力理由の分類方法」に示す。本分類方法は、栗原、関(2018)に従うものである。

表 1: 「好きな漢字」「覚えやすい漢字」の出力理由の分類方法

分類項目	分類方法詳細
①意味 1 (価値観)	学生が、その漢字が表す意味、概念が好きな漢字。特に、自分が大切にしている価値観を表す漢字。
②意味 2 (好きなもの、身近なもの、興味があるもの)	学生が好きな物を表す漢字。特に、身の回りの好きな物、身近な物、興味がある物を表す漢字。
③パーツ	漢字の一部分に、既に知っているパーツがある漢字。あるいは、パーツそのものの漢字 ⁵ 。
④形	ストローク数が少なく、書きやすい漢字。象形文字のように、漢字の形をストーリーで理解できる漢字。
⑤熟語	その漢字を使って漢字熟語が作りやすい漢字。一つ覚えておくことで、効率的に漢字熟語のバリエーションが増える漢字。
⑥頻度	日本語学習の際によく出てくる、また使う漢字。
⑦属性	名前、生まれた曜日、干支、性格、年齢など、自分の属性を表すときに使う漢字。
⑧学習順	日本語学習における学習順位が早い漢字。あるいは、学生自身の漢字学習において、学習の順番が早かった漢字。
⑨読みやすさ	学生のこれまでの日本語学習においては、複数の読み方が出てこなかったため、読み方を覚えやすかった漢字。
⑩その他の興味	上記①～⑨以外

次に、以下「表 2: 「好きな漢字」「覚えやすい漢字」」に、JEDUCATION CENTER の被験者が挙げた「好きな漢字」と「覚えやすい漢字」を、表 1 の分類に従って五十音順に示す。複数の被験者が挙げた漢字、漢字語彙については、漢字の隣の括弧内に回数を記載した。記載のないものはすべて 1 回である。被験者が漢字、漢字語彙を全く挙げなかった項目については、欄内に斜線を引いた。

表2:「好きな漢字」「覚えやすい漢字」

分類項目	好きな漢字	覚えやすい漢字
複数回挙げた漢字	雨 (2)、犬 (2)、海 (2)、風 (3)、金 (3)、食 (2)、楽 (2)、冬 (3)、水 (3)	行 (4)、一 (8)、川 (4)、口 (6)、三 (3)、出 (3)、二 (5)、入 (2)、日 (2)、人 (3)、山 (7)
①意味1(価値観)	明、新、好、楽、土、習	
②意味2(好きなもの、身近なもの、興味があるもの)	嵐、犬 (2)、歌、馬、海、風 (2)、金 (3)、黒、世界、旅、東北、林、冬 (3)、料理	山
③パーツ		
④形	雨 (2)、今、海、終、風、川、薬、口、答、寒、楽、茶、鳥、何、花、火、水 (3)、森、世	雨、行、一 (5)、川 (4)、木、口 (5)、車、三、十、田、二 (3)、入、林、日、人 (3)、文、目、森、山 (6)
⑤熟語	東、本	
⑥頻度	学生、魚、小、食 (2)、大、肉、日本、無料、私	行 (3)、一、口、語、出 (3)、入、日、本、休
⑦属性		三
⑧学習順	行	一 (2)、三、二 (2)
⑨読みやすさ		
⑩その他の興味		

5. 「日本語力が低い学習者は形重視で漢字を記憶している」と言えるか

まず、表1および表2をもとに、被験者が漢字、漢字語彙を出力する際、どのような理由による出力が多いのかについて考えてみたい。本研究では、被験者が漢字、漢字語彙を出力する際の理由を表1のように10分類しているが、分析にあたっては、先行研究と同様の枠組みで考えるために、ここでは10分類を改めて「意味」「形」「頻度」「学習順」「読みやすさ」「その他の興味」の6分類にまとめる。「意味」「形」というまとめ方で分析を行うにあたり、従来の研究では、本研究が分類項目として立てている「①意味1(価値観)」「②意味2(好きなもの、身近なもの、興味があるもの)」「⑤熟語」「⑦属性」が「意味」に含めて議論されてきた項目であり、「③パーツ」「④形」が「形」に含めて議論されてきた項目であるため、ここでも、①②⑤⑦をまとめて「意味」、③④をまとめて「形」とする。

表2をもとに、以下表3では、被験者が「好きな漢字」「覚えやすい漢字」として挙げた漢字、漢字語彙の総数と異なり語数を出力理由ごと(「意味」「形」「頻度」「学習順」「読みやすさ」「その他の興味」)に示す。「割合」としてパーセンテージ記号を付けて表示している数字は、各区分に分類された漢字、漢字語彙の語数の合計個数に対する割合を百分率で計算し小数点以下を四捨五入⁶した数字である。

表 3：被験者が挙げた漢字、漢字語彙の総数と異なり語数および割合

分類項目	好きな漢字				覚えやすい漢字			
	総数	割合	異なり 語数	割合	総数	割合	異なり 語数	割合
意味 (①②⑤⑦)	28 個	46%	22 個	43%	2 個	3%	2 個	6%
形 (③④)	22 個	36%	19 個	37%	39 個	66%	19 個	58%
頻度 (⑥)	10 個	16%	9 個	18%	13 個	22%	9 個	27%
学習順 (⑧)	1 個	2%	1 個	2%	5 個	8%	3 個	9%
読みやすさ (⑨)	0 個	0%	0 個	0%	0 個	0%	0 個	0%
その他の興味 (⑩)	0 個	0%	0 個	0%	0 個	0%	0 個	0%
合計個数	61 個		51 個		59 個		33 個	

被験者が挙げた「好きな漢字」「覚えやすい漢字」について、表 3 から言えることが二つある。一つ目は、「意味」の重要性である。これまで、日本語力が低い日本語学習者の場合、漢字記憶は形重視であるという指摘が行われてきた。「好きな漢字」「覚えやすい漢字」という区別をせず、被験者が挙げた漢字、漢字語彙の総数だけを見るなら、「意味」を理由として挙げた漢字、漢字語彙の総数は 30 個（「好きな漢字」が 28 個、「覚えやすい漢字」が 2 個）、「形」を理由として挙げた漢字、漢字語彙の総数は 61 個（「好きな漢字」が 22 個、「覚えやすい漢字」が 39 個）である。この数字だけを比較するなら、被験者にとっての漢字記憶では「形」が重視されているという従来の指摘は納得できるものである。

しかし、「好きな漢字」「覚えやすい漢字」のそれぞれに着目して表 3 を見ると、「好きな漢字」のうち「意味」を理由として挙げられた漢字、漢字語彙の総数は 28 個、「形」を理由として挙げられた漢字、漢字語彙の総数は 22 個であり、「意味」の方が多い。一方、「覚えやすい漢字」の場合は、「意味」を理由として挙げられた漢字、漢字語彙の総数は 2 個、「形」を理由として挙げられた漢字、漢字語彙の総数は 39 個であり、「形」の方が圧倒的に多くなっている。

被験者が漢字教材として『ストーリーで覚える漢字 300』を使用していることを考慮すると、形をストーリーで覚えられる漢字を「覚えやすい」と感じていることは予測できることであるが、ここで注目すべきは、「好きな漢字」においては、被験者にとって「意味」が「形」と同様に重視されているという事実である。栗原、関（2018）では「被験者がインタビューで熱心に話すのは、漢字の「形」よりは、「意味」を手がかりにした「自分の話」である」（栗原、関（2018）p.30）と述べたが、表 3 のデータは、初級の日本語学習者にとっても、漢字を覚える際に個人の興味、関心が大切な要素であることを示すものである⁷。

二つ目は、「覚えやすい漢字」として認識されている漢字の、異なり語数としての少なさである。表3では、「好きな漢字」「覚えやすい漢字」のそれぞれについて、被験者が挙げた漢字、漢字語彙の総数と併せて、重複を取り除いた異なり語数を示している。この表において特徴的なのは、「覚えやすい漢字」のうち、「形」を理由として挙げられた漢字、漢字語彙については、総数では39個だが、異なり語数では19個と、ほぼ半減している点である。このことは、「覚えやすい形」であると被験者に認識されている漢字、漢字語彙について、複数の被験者が同様の認識を持っているという可能性を示している。実際、「覚えやすい漢字」のうち、「形」を理由として挙げられた漢字の総数39個のうち、「一（5回）、川（4回）、口（5回）、二（3回）、人（3回）、山（6回）」と、6個の漢字に重複があり、この6個の漢字だけで延べ26回挙げられている。

表2、表3のデータが示していることは、被験者の漢字記憶の理由と漢字習得の関係を考える際には、被験者が挙げた漢字の総数を見るだけではなく、その実態として実際に覚えている漢字の内訳を見る必要があるということである。表3のデータから推測できることは、初級で学ぶ漢字の一角に、学習者によって「形が覚えやすい」と認識されやすく、記憶されやすい漢字群があるという可能性である。しかし、本調査のデータによると、「形が覚えやすい」漢字群に含まれる漢字の数は多いとはいえず、「形で覚える」という学習方法が、習得漢字数を増やすことにどれほどの効果があるのかは不明である。本稿におけるデータ数はまだ少なく、「形を覚えやすい漢字群」についてはまだ仮説の段階である。この仮説については、今後、より多くのデータで検証する必要があるだろう⁸。

6. 漢字、漢字語彙の出力理由の重複状況

次に、本アンケート調査において被験者が出力した漢字、漢字語彙の異なり語数とその内訳に着目することで、漢字、漢字語彙の出力理由の重複について考える。JEDUCATION CENTERにおける調査で挙げた漢字、漢字語彙の総数は120個であるが、異なり語数では以下の64個である。

明、新、雨、嵐、行、一、犬、今、歌、馬、海、終、学生、風、金、川、木、薬、口、車、黒、語、答、魚、寒、三、十、小、好、世界、食、田、大、楽、旅、茶、土、出、東北、鳥、何、習、二、肉、日本、入、花、林、火、日、東、人、冬、文、本、水、無料、目、森、休、山、世、料理、私

また、以上の64個のうち、四角で囲んだ23個は、アンケート調査において複数回挙げられた漢字である。次の「表4：JEDUCATION CENTERの調査における漢字の分類結果の重複状況」は、この23個の漢字が挙げられた理由の重複状況を一覧表示したものである。

表4：JEDUCATION CENTER の調査における漢字の分類結果の重複状況

	漢字	好きな漢字								覚えやすい漢字							
		①意味1	②意味2	③パーツ	④形	⑤熟語	⑥頻度	⑦属性	⑧学習順	①意味1	②意味2	③パーツ	④形	⑤熟語	⑥頻度	⑦属性	⑧学習順
1	雨				2								1				
2	行								1				1		3		
3	一												5		1		2
4	犬		2														
5	海		1		1												
6	風		2		1												
7	金		3														
8	川				1								4				
9	口				1								5		1		
10	三												1			1	1
11	食						1		1								
12	楽	1			1												
13	出														3		
14	二												3				2
15	入												1		1		
16	林		1										1				
17	日												1		1		
18	人												3				
19	冬		3														
20	本					1									1		
21	水				3												
22	森				1												
23	山									1		6					

表4では、挙げられた理由が複数にわたるものを灰色表示にした。対象となった漢字は14個ある。このことは、日本語能力試験N4以下の学生が知っている漢字がそもそも少ないということも理由ではあるが、同時に、同じ漢字であっても、その漢字を記憶する手がかかりを何に求めるかは学習者によって必ずしも同じではないことを示すものである。このデータは、初級の学習者への漢字教育を考える上で参考になるものであり、記憶の手がかりを複数提示されるような学習を行うことが、学習効率の向上につながる可能性があることを示す。

7. 初級の日本語学習者が挙げる漢字の特徴

最後に、本アンケート調査で挙げられた漢字の特徴について触れておきたい。既に述べた通り、本アンケート調査において被験者が挙げた漢字、漢字語彙の異なり語数は64個であ

る。その中で、熟語として挙げられたものも一個ずつの漢字に分け、重複を排して一覧表示すると、以下の 67 個である。そのうち、四角枠で囲んだ 29 個、約 43% が象形文字⁹である。

明、新、雨、嵐、行、一、犬、今、歌、馬、海、終、学、生、風、金、川、木、
葉、口、車、黒、語、答、魚、寒、三、十、小、好、界、食、田、大、楽、旅、
茶、土、出、東、北、鳥、何、習、二、肉、入、花、林、火、日、東、人、冬、
文、本、水、無、料、目、森、休、山、世、料、理、私

現在の日本語能力試験においては、「出題基準」による漢字リストが提示されていないため、便宜的に『漢字マスター N4、N5』（アークアカデミー）で扱われている漢字を参考に、以上 67 個の漢字の特徴について述べる。『漢字マスター N5』で取り上げられている漢字は 118 字、『漢字マスター N4』で取り上げられている漢字は 209 字、そのうち象形文字は、それぞれ 52 字（約 44%）、39 字（約 19%）である。同テキストの N4 と N5 の累計の漢字数は 327 字、そのうち象形文字が 91 字（約 28%）であることを考えると、調査対象を N4 以下の学生とした本調査結果における「象形文字が約 43%」という割合は、学習漢字の内の象形文字の実際の割合に対して高い数値であると言える。

このような傾向が見られることの理由としては、被験者が漢字学習の導入時期に、漢字を絵からイメージできる文字として学んでいることが考えられる。実際、本研究を通じて行っているアンケート調査においても、毎回「～の形に似ている¹⁰」という出力理由が挙がっている。

本調査から、象形文字の成り立ちの説明が、学習者の記憶に残りやすいことは明らかだが、このことは、日本語学習者が「漢字学習が嫌になる」という問題を考える上での重要な情報であると考えられる。常用漢字 2,136 文字のうち、象形文字は 256 文字しかなく、そのうち、簡単な絵を描いて、分かりやすく成り立ちを説明できる漢字は N5、N4 で学ぶ数十文字しかない。本稿の 5 節では、JEDUCATION CENTER での調査結果について、「覚えやすい漢字」として「形」を理由に同じ漢字が複数の被験者によって出力されていることを示したが、そこで触れた「形を覚えやすい漢字群」に象形文字が多く含まれているという可能性がある。

象形文字は確かに形としては覚えやすいのだが、これを学び終わった後の漢字学習は、膨大な数の漢字をひたすら覚えていくという単調な方法に変わることになる。「漢字学習が形の学習として始まる」こと、「学習方法が途中で変わる」ことが、漢字学習を継続する上での問題であるという可能性が窺えるデータである。

8. おわりに

本稿は、JEDUCATION CENTER におけるアンケート調査結果より、自由放出法を用いたアンケート調査では、被験者が出力した漢字、漢字語彙の内訳を詳しく検討する必要があることを示し、特に初級の日本語学習者の漢字習得のプロセスについて、以下の傾向と可能性があることを述べた。今後の課題は、これらの指摘についての検証を行い、学習者のモチベーション維持に有効な漢字教材作成に反映させることである。

1) 「日本語力が低い学習者は形重視で漢字を記憶している」と言えるか

- 「好きな漢字」「覚えやすい漢字」を区別してデータを分析すると、「好きな漢字」においては、被験者にとって「意味」が「形」と同様に重視されていることがわかる。初級の日本語学習者にとっても、漢字を覚える際に個人の興味、関心は大切な要素である。
- 被験者が挙げた漢字、漢字語彙のうち、実際に覚えている漢字の内訳を見ると、初級で学ぶ漢字の一角に少数の「形を覚えやすい漢字群」があるという可能性が窺える。それは、複数の被験者がある特定の漢字を「覚えやすい漢字」として挙げていることから分かるのだが、それ以外の漢字については「形を覚える」方法を継続することで習得漢字が増えていくのかは定かではない。

2) 初級の日本語学習者における漢字記憶にはどのような傾向がみられるか。

- 初級の学習者が「好きな漢字」「覚えやすい漢字」を出力した場合、漢字、漢字語彙の出力理由が複数にわたる現象が見られる。これは、同じ漢字であっても、その漢字を記憶する手がかりを何に求めるかは学習者によって必ずしも同じではないことを示すものである。このデータは、初級の学習者への漢字教育を考える上で参考になるものであり、記憶の手がかりを複数提示されるような学習を行うことが、学習効率の向上につながる可能性があることを示す。
- 初級の学習者が記憶している漢字には、象形文字が大きな割合を占めている。このことは、初級の日本語学習者が、漢字学習の導入時期に絵によるイメージを参考に、形から漢字を覚えるというプロセスを経験していることが影響していると考えられる。しかし、この学習方法においては、象形文字の学習が終わった頃に漢字学習の方法を変えざるをえないことが、漢字学習のモチベーションを維持する上での問題になっている可能性がある。

謝辞

今回のアンケート調査にご協力くださった、JEDUCATION CENTER の 13 名の学生の皆さま、加藤玲佳先生をはじめとする先生方、Managing Director 長谷川卓生様に深く感謝申し上げます。

〈注〉

- 1 栗原、関（2017）（2018）においては「非漢字圏の学習者」という用語を使用していたが、本稿で

は「非漢字系学習者」という用語を使用する。これは、高見澤孟監修『新・はじめての日本語教育基本用語事典』（アスク）による「欧米人や大部分の東南アジア人、アラブ人、アフリカ人など日本語教育で初めて「漢字」を学習する人達を非漢字系学習者と言う（p.36）」という定義に沿うものである。本調査においては、アンケート調査後に日本語教師にインタビューを行ったが、その際に、JEDUCATION CENTER で学んでいる学生の中には、父親が日本人という学生も在籍しているという説明があった。非漢字圏の日本語学習者であっても、必ずしも「日本語教育で初めて「漢字」を学習する」というわけではないという個別あるいは民族的な事情を考慮し、本稿では「非漢字圏の日本語学習者」ではなく、「非漢字系学習者」という用語を使用する。なお、今回のアンケート調査に協力していただいた13名の学生は、全員「非漢字系学習者」である。

- 2 本研究調査は、文部科学省科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（課題番号：15 K 12897、研究代表者：小川早百合）として、次の研究チームにより行っている：小川早百合（聖心女子大学）、本田弘之（北陸先端科学技術大学院大学）、関かおる（神田外語大学）、尾崎久美子（国際基督教大学）、栗原由加（神戸学院大学）。
- 3 バンコク（タイ）の中心部に開校されている、在籍者数約450名の日本語学校。（所在地：2303 23th Fl. Liberty Square 287 Silom Rd. Bangkok 10500 Thailand）
- 4 加納ほか（1989）の調査では、漢字放出理由の判断を実験者が行っているため、「連想そのものが意味によるものか形によるものかを決めかねる（あるいは連想が重複していると考えられる）場合が多い」（加納ほか1989, p.79）と述べられている。また、伊藤ほか（1999）の調査では、漢字放出後にインタビューを行い、改めて被験者に放出理由を聞くため、「被験者が手がかりを報告する際に漢字の想起時とは異なる判断を行ったり、想起時以上の解釈を付け加えたりした可能性を排除することができないという問題がある」（伊藤ほか1999, p.86）と述べられている。また、調査後に日本語教師2名が漢字放出理由の客観的な判断を行ったところ、被験者の全放出漢字のうち34.2%が手がかり不明あるいは判定不能であったということである。
- 5 ここでいう「パーツ」とは、必ずしも部首のことを指すわけではない。
- 6 例えば、表3の「好きな漢字」の「意味（①②⑤⑦）」に対する「割合」「46%」とは、「合計個数」「61個」に対する「総数」「28個」の割合が46%であることを意味する。割合の数値については、小数点以下四捨五入という都合上、「割合」の縦列を計算した合計が100%ではない列もある。
- 7 表2で挙げられた漢字の中に「嵐」という漢字がある。この漢字はN5、N4対象の漢字テキストに掲載される漢字ではないが、「あらしの歌がすきですから」という理由で挙げられていた。このように、形が簡単ではない漢字であっても、被験者個人の興味、関心の対象であれば、「好きな漢字」として記憶されている場合がある。
- 8 JEDUCATION CENTER での調査で挙げた以下64個の漢字、漢字語彙のうち、四角で囲んだものが、ラオス国立大学でも挙げた漢字、漢字語彙である。39個が重複している。

明、新、雨、嵐、行、一、犬、今、歌、馬、海、終、学生、風、金、川、木、薬、口、車、黒、語、答、魚、寒、三、十、小、好、世界、食、田、大、楽、旅、茶、土、出、東北、鳥、何、習、二、肉、日本、入、花、林、火、日、東、人、冬、文、本、水、無料、目、森、休、山、世、料理、私

なお、重複していない25個の漢字、漢字語彙のうち、「三、入」のみが「覚えやすい漢字」として挙げられているもので、残りは「好きな漢字」として挙げられているものである。ここでは、「形を覚えやすい漢字群」が、日本語学習者の国籍に関わらず、共通に覚えられている漢字なのではないかという指摘にとどめる。一方、「好きな漢字」の記憶については、学習者の母文化が影響している可能性があることを示す。

- 9 象形文字の定義および判別は、白川（2012）による。
- 10 ある被験者は、「川」という漢字の出力理由に川の絵を描き、「形が似ていますから」と書いていた。

〈参考文献〉

- 伊藤寛子、和田裕一（1999）「外国人の漢字の記憶検索における手がかり－自由放出法を用いた検討－」『教育心理学研究』47, pp.346-353.
- 加納千恵子、清水百合、竹中弘子、阿久津智、石井恵理子、海保博之、出口毅（1989）「自由放出法による外国人の漢字知識の分析」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』4, pp.65-91.
- 栗原由加、関かおる（2017）「非漢字圏における漢字教育に関する実態調査および提言－ヤンゴン外国語大学におけるインタビュー調査を通じて－」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第2号, pp.17-30.
- 栗原由加、関かおる（2018）「漢字学習の意欲に影響する要因－ラオス国立大学及びヤンゴン外国語大学の調査結果の比較検討を通じて－」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第3号, pp.17-32.
- 白川静（2012）『常用字解』〔第二版〕平凡社.
- 高見澤孟監修（2004）『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』アスク.

〈付記〉

本稿は、文部科学省科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（課題番号：15K12897. 研究代表者：小川早百合）の成果の一部である。